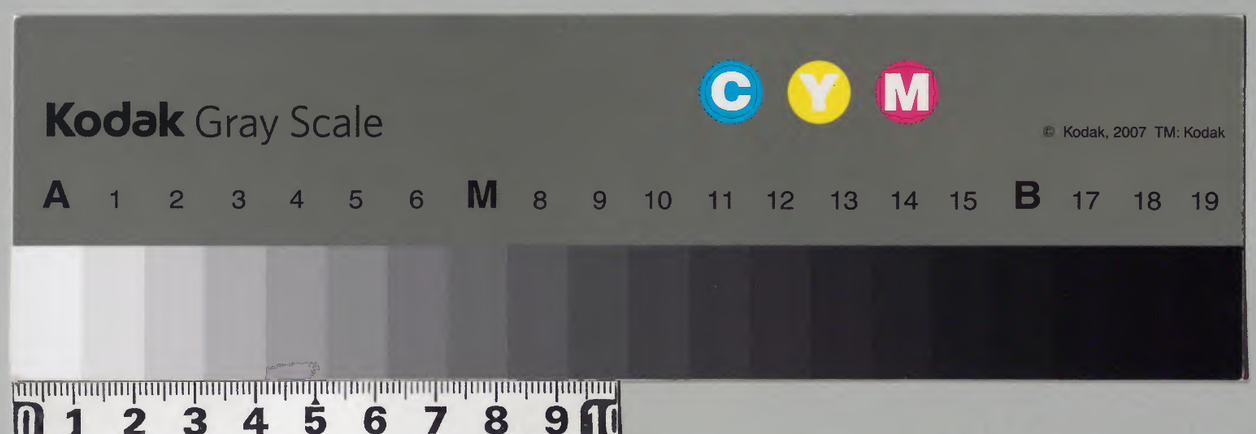
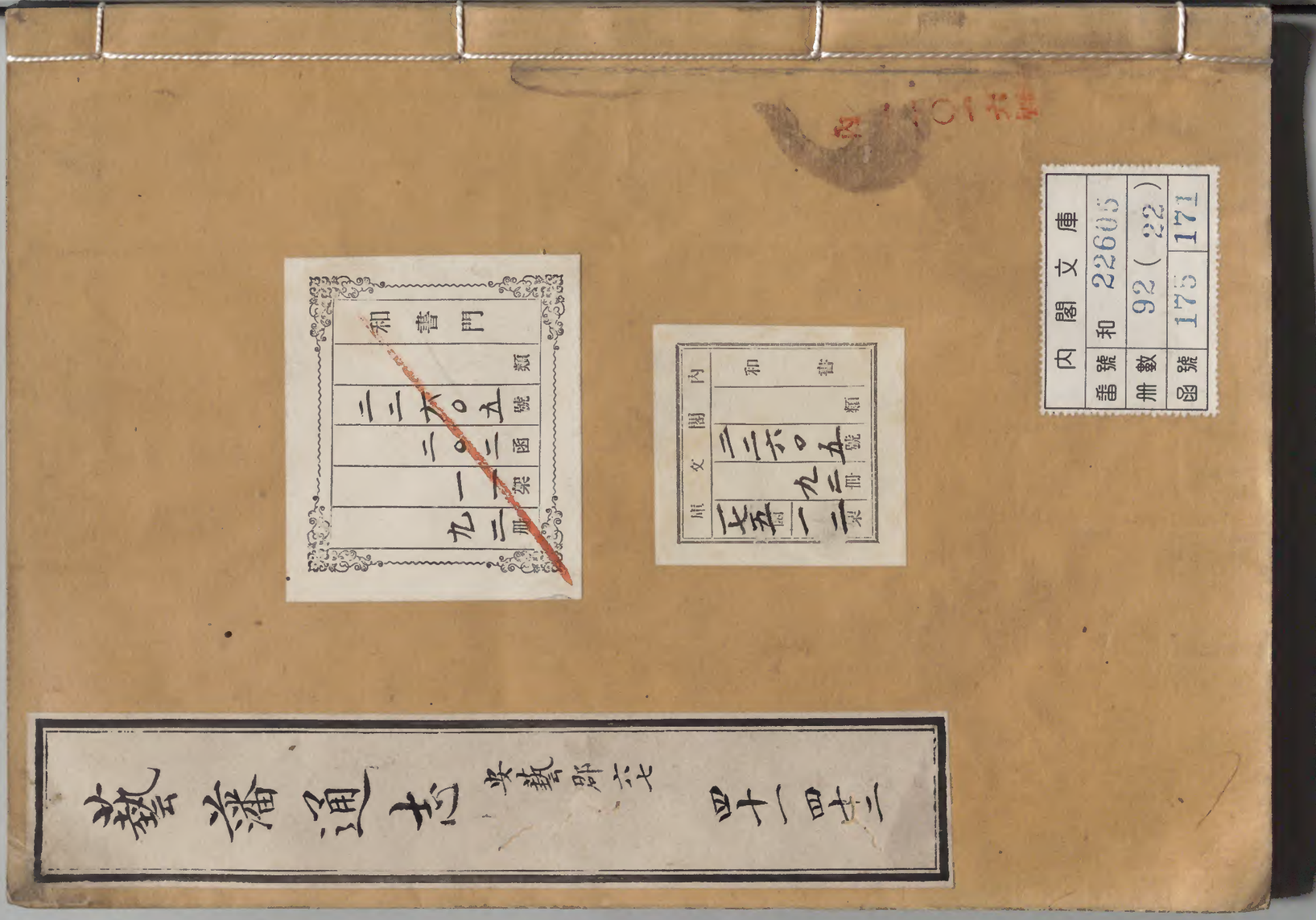


国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

藝藩通志卷四十一

安藝國安藝郡六

人物

孝義

故家

内一一〇一六號

藝藩通志卷四十一

安藝國安藝郡六

人物

石井七郎源末忠　故國府の人、本姓ハ、佐伯、元弘中、倫旨を受て、伯耆國ふ赴き、戦功あり、湊川の役ふ、楠正成と同く戦死せ、墓ハ、兵庫ふありと いつつ、田所氏の祖、信首が弟なり、倫旨申文、今そ の家ふ蔵そ、

浦兵部宗勝　瀬戸島の人、小早川氏ニ属して、武勇絶倫、豊田郡、乃美村の城ニ居り、二萬餘石を領して、兵頃ハ、氏を乃美と称ち、後忠海の城ニ居、三万三千石を領ス、文祿年中、朝鮮の役ニ赴き、疾あり、帰りて、流前の立花山下ニ没ス、

原宮内　同第新四郎　石田長兵衛　多賀谷左
郎右衛門　藤村石見　林次郎兵衛　多賀谷
次右衛門　原興九右衛門　兵ニ倉橋島の人、原

宮内兄弟ハ、八幡社の祠官ニて、島の城主ニ属し、城陥るの日、最力戦ス、後石田ニ帰ス、七人と共ニ、朝鮮の役ニ、赴き、戦労あり、最兵衛、太郎右衛門ハ、善射を以、誉を得ニ、共ニ百里人のお伝ふ、

加藤休心　新右衛門　孫三　附新右衛門一妻
欣五郎

海田市の人、休心名ハ重明、初三郎右衛門と称ス、剛正仁恕ニて、善く族を睦ひ、衆を愛し、子孫蕃衍ス、藩君の眷顧を蒙り、宅を賜ひ、粮を給セ

う孫、勇孫新右衛門、名友益、吟不楽と號す、業
を植田吉節ふ受け、志を篤くし、学を信ず、所著
社倉推演書あり、玄孫孫三、名友徳、亦玄節門人
なり、業成て擢ら近、本藩の儒師となり、世ゝ儒
教を業ふ、徳業履歴、具ふ行状みあり、藝文の部
ふ見ゆ、友益の妻ハ、賀茂郡、七条村、医玄甫
の女なり、人となり、閑雅、幼より書を善くし、和
歌ふ長ず、具和歌、及び家園記あり、休心ふ世の

孫、欽五郎、名貞利、寛政中、府學句讀師となる、早
く没ー故、

香川将監　附五左衛門　孫六

将監、名正直、矢野村
祖官なり、加藤孫三門人となり、志を篤ー、学を勉
む、晩年朱子社倉法を挙げ、里正ふ諭ーて、其郷
ふ試む、遂ふ、大ふ國中ふ行ハる、将監勧誘の力
許多なり、因て年俸を賜ひ、歳首朝謁を許さる、
五左衛門、名與次、矢野村里正なり、孫六名真信、

押正村の里正、並ふ将監が教を奉て、社倉法を
兵卿ふ行ふ、誠實みして、私なく、支散收納、各其
宜を得、民甚便ることを、後山銭ふ逸て、其功大
ふ顕る、将監と同しく賞賚せられ、封内ふ命じ
て、渠等が所行ふ則とらしむ、事ハ社倉ふ見ゆ、
野間五郎兵衛　附傳　牲添　松本門　並ふ、倉橋島の
人、五郎兵衛、隠居して、宗圀と称す、性逸遊を好
み、常ふ古昔を慕ひ、深く事跡の亡佚するを
歎く、因て天喜より貞治頃ふ至まで、當島の事
跡、見聞ふ随ひ、記載す、未果して死す、牲添ハ此
島西蓮寺の住僧なり、真志を継て、遂ふ一書を
撰成し、名づけて倉橋風土記とふ、松本南門ハ、
宗圀が後なり、家富て驕らず、頗素ふして、施を
好む、居民、村路の陰を造しむ、困て、已ふ時を指
て、これを担夫ふ苦しむ、困て、已ふ時を指
中の人なり、

林幸右衛門　名ハ蓼陳、倉橋ヶ浦の人、世ゝ里臧ヲ
ヲ、性周密、温茶ヲ
好ム、享保庚戌、鹿充渡浦ヨリ松原ヲヘ
きて、一駅トスルニ、幸右衛門カ功多シトテ、
汲大里正の格ヲ進ムルモノ、

孝義

蒲刈島三右衛門　親ヲ事ヘテ、甚孝ナリ、居親温
清常ニ其誠ヲ盡セリ、父母死シテ、佛ヲ信シ給ヘバ猶
ホ二親ヲ奠ルガ如クニシテ、寺ヲ請シ、之称名ヲ
幸来、藩賞アリ、以下賞賜、皆ナ藩ヨリ賞ヲ
ヨシトナリ、

中野村市郎兵衛　父、風痺ヲ病ムヲ扶養力ヲ
竭セ、其法ヲ欲スルヲ聞テ、必ス行ク、如此ス

ること、永八年、一日のごとし、元禄四年賞あり、

蒲刈島兵右丈　島の長なり、性仁厚みして、親を
養し、族を睦び、貧氏を賑恤す、正徳四年甲子、府
より召て、白銀一貫を賜りて、旌異せらる、

仁保島吉兵衛妻よし　旧原村の人なり、
病夫を看養して、累年、力を盡し、又己が母をも
迎て、愛養するを以て、衆家極りて貧しくそれども、
御隙為に賑給しそれども、受けず、思つらく、報恩

の期なくして、元文五年庚申、賞恤あり、

因島旨人朝一　毎旦、早く起て、母を拝し、恩を謝
し、衾を畳め、盥を進め、飯を運び、茶を漱ふの類、
嫂の手を待たず、竈枚ふるも、必其方を背け、
風雨烈しきも遵ふも、遇ふ時を過さず、元文
五年賞あり、

府中村源三郎　高宮郡深川村の人なり、来りて、
源兵衛が女婿となる、源兵衛貧困して、其舎屋

をさへ、解き喪ふをもとゝ、源三郎、甚労苦して、遂ふ其家を起して、親を安せしむ、寛保三年癸亥、称賞あり、

牛田村三十郎　母みの事ついて至情あり、家ふ衾帳なし、乏ふ牧をもらひ、その身を以、温む、寛延元年辛未、称賞あり

府中村六兵衛妻あさ　父、悪瘡を病むに、迎ふ六兵衛ふ請ふて、父の養ふを、いと切なり、遂ふ六兵衛ふ許ふ帰り養ひ、勤苦を極む、安永元年壬辰、賞恤ちらふ、

牛田村源三郎妻　治田郡、中間子村の人、来て源三郎ふ嫁す、家ふ、大姑舅姑あり、皆既ふ老羸せり、女子五人ありて、皆孤弱なるふ、夫糸脚癱を病むに、なる多くの田畑を耕し耘り、夫ふかりて、村の閭守をまで、勤め、其ふたらくさ為、丈夫も及ばざる、其老人病夫を省ふ養ふを、極て哀

まふ、一夜も、安く寢ざで、人或ハ其勞を慰まバ、いへらく、是此家ふ來りしより、恩を蒙ることを深く、いつぐり勞苦すとも、報ふらざらんと、男姑人ふ對すれバ、泊て其孝を語る、安永九年庚子、旌賞あり、其後姑獨存し、歳八旬ふ踰て、ある冬六十ふ近くれども、獨事ごとに、姑ふ問ふ、天明六年、寛政五年、また賞恤あり、

警固屋村半右衛門同妻きよ　継母ふ孝に、異母弟妹ふ友愛あり、天明四年甲辰賞あり、其あきるに、ふ善く姑ふ事ふつとめ、文化二年、夫を失ひしく賞せらる、

蒲刈島新之助　家貧しく、雇傭して、父母を養ふ已癘を患ふるふも、山ふ入て、呻吟し、醉て復、薪を負ひ帰り、親をして知らしめず、寛政三年辛亥、於賞と蒙る、

奥海田村忠右衛門　老母ふ孝順、身老て衰つゞ、

寛政四年、壬子賞あり、
仁保島源七　老母ふき順、勉て真心を悦ばしむ、
寛政四年賞ありき、
板村貞四郎　父母ふき順なるを以、寛政四年賞
あり、
矢野村由喜右衛門　大庄屋を勤め、家人を、多き
れど、親ふ奉ずるを、必賞し、一族同居して、敦
睦なるを比ふし、寛政五年癸丑旌賞あり、

上瀬野村茂兵衛女すな　善く父母ふ事へ、よ
く弟妹を撫育せ、寛政五年於賞あり
江田島喜五郎　病父を養ふて、勤苦、年を累ぬ、寛
政五年賞を蒙る、
戸坂村又平　倭母ふき孝敬なるを以て、寛政七年
賞あり
田村忠蔵　頑父ふ事順し、倭母及び異母弟に深
愛ありて、寛政五年賞あり、

同村素七同妙妹　又、中風を患ひ、家孫貧しくして、
素七、田を売り、薬を索むも、母も亦病み卧して、
深く憂苦を、隣、また閑門、哀憐して、薬を施しを
る、親死して、哀毀、病を発を、姉妹幼より、府下ま
あるしが、是も至情あつて、衣飾を売り、采樵紡績
して、帰養、力を竭を、寛政五年、三人共ま賞あり、
また倶つも亦素孀ゐる。

同村喜三七　徳右衛門　また孝順を以て閑也、寛

政五年賞あり、

瀬戸島忠兵衛　瀬戸町、秀右衛門が家来なり、
善く遺孤を奉し、みよく真家人を率ひ、昼ま相(かわ)
うで、寒ま懈ふまず、四十年間、忠勤他(ひと)まで、寛
政五年、旌賞せらる。

倉橋島権之助妻きく　姑、風痺を患ひ、夫もまた
疫ま罹る、きく、これを善く調護し、其他、固く婦
道を執る、寛政七年乙卯賞あり、

燒山村長松女よし
と患ひ、日ゝく宿うるを、厚く孝養するを以、寛
政九年丁巳賞あり。
江田島次郎　島の長う、孝敬睦するを以、享
和三年癸亥、旌賞せらる。
田嶋深之丞妻ぬい　男姑に事つて、至情あり、享
和三年賞あり。
府中村庄松　孝順するを以、文化六己巳、賞を

蒙る。
中山村阿三吉兄弟　長を阿三吉、仲を喜八、季を
長蔵とよぶ、二兄八、他家の養子となり、長蔵、家を
継く、皆孝友あり、文化六己巳共に賞あり、
戸坂村忠八女きよ　孤嫠母を養ひ、累年最幸苦
を、文化六年賞恤を蒙る。
中山村甚六女きく　父母に孝あるを以、文化六
年賞せらる。

畑賀村平兵衛妻も　姑ふ事ろ孝厚し、文化
十四年丁丑、賞あり、
温品村與四郎同妻きく　與四郎善く母ふ事へ、
其妻も亦これ二倣ふ、文化十四年共ふ賞あり、

故家

府中村田所氏　府中ハ、即故國府なる故ふ、朝廷
より、田所職を置れ、世し其職ふ任せ、遂ふ家号
とせ、本姓ハ、佐伯なり、或ハ藤原、源を称する時
もあるし、中世、三宅、保井田、石井なで称せるは、
其所領の地名ヒ以て、氏とせるなり、苔巌島社
大祭ふハ、必奉幣使、京より下走りしが後、田所を
して、行はしむ、遂ふ、其職を務む、もとハ、田所

職を專らつとめて、屬官の内ふ、德公文、廳行事
なども、ありしも、今ハ全く嚴島の神職ふ
て、屬官十數名ありし、幣上大夫、祢世大夫、一ふ、祝
大夫
判官大夫、幣奏大夫、樂頭大夫、舞方大夫の類ふ
り、其元祖、延喜年中ふ始て、此土ふ來るといひ
傳ふども、詳ならず、寛治中ふ並信と云ありし祖
父、信職ふ從て、大帳所、德大判官ふ補せらる、こ
ゟ以後の事ハ、知る處く、其以前の事ハ、尚傳

と云ふ、廳宣補下狀、及び田務の諸文書、數百通、
家ふ藏ふ、信職ゟ、今の伊織元俊まで、三十餘
世なりとふ、村内第一の名家なり、
中野村、上瀬野村、野村氏　兼久三年、阿曇沼親信、
甲斐國ゟ移り來る、三男信岡、四男貞信、始ひ
來る、此二人を祖とす、初め山城國、野村ふ居る
と云ふ氏なり、信岡の後、泰治、朝鮮の役ふ死す、幼子
糸之助、後ふ野村蒜左衛門泰次と改む、中野村の民となる、今の

新助八、六代の孫なり、又貞保の後、淡路、其子
太郎と、相継ぶ赴き、淡路八戦死し、太郎八、生還
し、孫兵衛と改名して、農となり、今の大里正、孫兵
衛まで八代、太郎戦功の感状、今家ぶ蔵む、信綱
自筆なり、数通八、廿餘代ぶ伝ふらぬ、

海田市加藤氏　先祖藤原國盛と云、其裔孫、加藤
重好、建保年中ぶ、故府松崎八幡の棚守職たり、
数世の後、出て廣島ぶ居り、猫屋と号す、後又海田
ぶ移る、重好より、今孫ぶ当ぐで八世、

中野村熊野氏　泰祇元年、熊野義狭と云る人、甲
斐國より来り阿曽沼ぶ仕ふ、其後太郎兵衛と
ソつる八、長門ぶ従ひ往き、第五近八農となる、五近
より、今の五兵衛まで七世

同村金子氏　先祖、金子小次郎家正、兼久年中、関
東より来り、高宮郡、秋村ぶ住す、武田氏ぶ属す、天
文年中ぶ、平左衛門重正と云る者あり、其子重

忠と共ふ武田を背き、中野村ふ来りて、阿曽沼
氏ふ属そ、子孫世々、此村の農民こう、今の吉左
衛門ふ至る七世、
旧村野尚氏　先祖、野尚隆則、矢野落城の後、中野
村ふ隠る、其子藤右衛門、農民とう、屋名を横路
とよぶ、今の清左衛門まで六世、家伝ふ云、隆則
とうりしが、阿曽沼の叔父にて、死を免き、中
野村ふ来り岩見と改名して、居るとよふ、
矢野村野尚氏　先祖野尚隆則が弟、満五郎則全

より、今の五左衛門ふ至る十三世　家伝ふ云、隆則
し、則全ハ、京師ふ随ひしが、福島氏入封の時、帰俗
ともとふ、中野村、野尚氏の落城の日、自害
私をもらんで、陰徳を重ねて、甚是
が揚るを以、無名より、毛利ふ申請て、一命を助
けて、降参す
と見へたり、
旧村香川氏　先祖、香川五郎、平経高と称し、又康
永年中ふ、修理大進熙政と云る人あり、其ふ
尾張内海、八幡宮の奉祀こう、勝重ふ至る、文明
二年、野尚奥様ふ従ひ、此ふ来り、内海の八幡を

此ゟ移して、世々奉祀ス、勝重より、今の泊向
國休まで十二世、

海田市神保氏　先祖千葉忠常より、第十八世、神
保経胤あり、今神保屋と称セ
ゟも、尓是ゟ曲る、経胤の後信胤、永
正年中ゟ、此ゟ来りて、大内氏ゟ扶ケ、食邑を受
く、信胤の孫、新四郎、降りて庶人となり、世々海田
驛の通事を掌る、家ゟ豊太閤、脚夫、賃の文書を
蔵セ、信胤ゟり、今の清次郎まで九世、

蒲刈三瀬多賀谷氏　先祖多賀谷修理實宣まで
数世、此島の城ゟ據る、後島津氏ゟ亡ス、其子宮
内、城南ゟ老山ゟ居る、後村氏となる、家名、今ゟ南
肥前大村侯と同姓なるを以、世々眷遇ヒラル、
宮内より、今の平左衛門ゟ至る十世、

江田島久枝氏　先祖、久枝忠三通重、貞和二年、甲
斐より此ゟ来り、第五世農民となり、久枝を改て、吉
原と称セ、第六世より、安芸里正となる、通重より今

の次郎ふ子る、十六世孫、初通重ふ至り、来係、
家僕七人の商ふ村内ふありて、真田宅、今ふ次郎
より給すとよ、
府中村三宅氏　先祖、三宅新左衛門尉信、村の城
主、白井備中が家人ふ、真子兵部丞就世、毛利家
ふ事へ、後仕を辞して、醫となる、真子弥右衛門
就裕より、世々里正となる、今の弥八郎ふ子る九
世、

上瀬野村戸井氏　先祖、山城国、関東より来り、小
早川家ふ事へ、来地千石を領して、豊田郡、能良
村ふ居る、其二子、備中国、同じく朝鮮
の役ふ赴き、徳寺島門ふ戦死し、與右衛門ふ郡
奉をあひて帰る、其子亮安衛より、此村の民と
なり、今の徳ます七世、
中野村来島氏　先祖、来島源右衛門通重、河野家
の族より、伊豫國より、畑賀村ふ来る、毛利家

お の 浜、此村の民となり、屋名を久保田とぞ、
今の源右衛門まで七世、
熊野村佐々木氏　先祖、佐々木左門高吉、天正年
間、近江より讃岐ふ富し、遂ふ此ふ来居る、其子
太郎右衛門高弘、氏を改て城とふ、今の祖平次
包秀まで、十世、家ふ古刀を蔵ス、
矢野村寺川氏　先祖吉良右衛門ハ、三河國の人、
弘安四年、蒙古防禦として、石見の地頭職となり

て、其家浪ふ羽隅と氏とし、又寺川とふる、祖朝
鮮の役ふ、寺川清右衛門、羽隅除右衛門、戦功あり、
今農文五郎、寺川の裔なり、弘安以来の感状
など、享保年中、官府ふ出し、家譜ふ貧困ふて失
ひしとぞ、
押口村奥氏　里人の伝ふる所、當村始祖ふうの
家ふて、永正年中より、代々村の里正を勤め、
類稀なる舊家なりと、延宝三年失火して、舊記

を焼ふらバ、古代のと知まじ、今七百三十年餘
の田租免状を、お持ち、孫六とゆひしハ、社倉の事
みて、大功あり、大里正の格ふ進ず、年頭朝詣を
許され、永く屋舗下の地租を免さる、事ハ社倉
及び人物の部ふ見えたり、

藝藩通志巻四十二
、安藝國安藝郡七
土官流寓
城墟
墳墓

藝藩通志巻四十二

安藝國安藝郡七

土官流寓

中原惟道　矢野浦の徳公文ふ、仁治年間の人、

下五人、苦ふ嚴島所藏の古文書ふ見ゆ、

中原有通　瀬戸島波多見浦の徳公文ふ、

平守澄　江田嶋の在官徳公文、

藤原重高　田島の在官徳追補使、

征宗則　因島の庄官國侍なり、
征為宗　因嶋の小名公文なり、佐伯郡宮内村の人ふ、
害せらるゝ事、巌島古文書ふ見ゆ、
佐伯並伝　寛治年間、大帳ふ従大判官ふ補せら
ふ、田所氏の祖なり、
阿曽沼甲斐親綱　承久三年、甲斐より中野村、鳥
羽城ふ来り居る、子孫、公綱、卿阿、氏綱、並綱、卿晴、
親卿、氏卿、直卿、奥卿、陸卿、元秀、元秀ハ、朝鮮の役

ふ死す、子元卿、長門ふ移る、
白井加賀親胤　もとハ、千葉氏なり、文明年間、下
佐白井郡より来り、府中村出張城ふ居る、後に光
胤、膳胤、則胤、貞胤なり、明應年間、武田氏ふ属
し、大永後ハ、大内氏ふ属せ、後又大内ふ攻られ、後
ふ毛利氏ふ降る、
野間掃部重能　文安年間、尾張より来り、矢野、保木
城ふ居る、子孫ふ則澄、與勝、隆則なとあり、隆ふ

みまもり、毛利氏ハ滅ヌ。

多賀谷典重　本伊豫の人、明應文龜の頃、倉橋島を領
セ、子興頼、毛利氏ハ撃キ、興重　ハ　ともに戦没
して、家絶ヘ、若狭、阿波、嚴島皆記ハ、此国の多賀谷とハ
有、毋ヲ子ともあれバ、異説ともいふべし

秋山彦次郎入道　建武年間、牛田村の地頭ニて、
一書に、名ハ光氏と見ゆ。

能秀　建治年間の人、温科村の地頭なり、

藤原為重　為家の第三子、為教の子なり、拾ハ、風
雅集ハ、僧道全の歌を載て、題ハ前大納言為重、
安藝國ハ侍ると、郡人傳ニ云、為重卿ハ、當郡ハ來り、
しと見へ、こゝに、郡人傳ニ云、為重卿ハ、當郡ハ來り、
矢野、野間氏ハ托ちらる、大江石ハて、誰故草を橘
一人なりと、大日本史ハ、公卿補任、冷泉家系圖
をひて云、為重、永仁六年、生年流ニ佐渡ニ嘉元元年
召還ニ延慶三年、任権大納言、應長初、奉伏見上皇
勅撰ニ玉葉和歌集ニとりて、安藝國ハ配流の事と

は載ざれども、風雅集に載するをもて、風雅集に載するをもて、
旦道全の祖ふ、前大納言を称するを見れば、延
名還の後、まゝ此邦ふ謫せられ、まゝ、土人の
説、風雅集と合ふ、故ふ此郡の流寓ふ入る、
左衛　朝鮮の人、文禄の役ふ、俘とらえて、倉橋ふあ
り、其品賤しからざるとぞ、

城墟　宅地附

島巒（ここの）山　中野村ふあり、阿曽沼氏、数世ふ居、傳ふ、
阿曽沼氏、もと近江國、島巒（ここの）山ふ居、其後甲斐の
武山ふ移り、承久の頃、親綱始て此ふ来り、築く、
十五世、元卿ふ至て城廓を此山を島巒と呼ひ
しふ、舊里を慕ひ、其名を取用ふるなり、

島越山　掛山　秋城　陣丸　共ふ田村ふある、
是皆島巒山の属城にて、阿曽沼一族の守りし

所ある處なれど、名を傳へざれば、以下城名のみ擧ぐ

ハ、らふ主名を考へざるべし、

串山（くしやま）　奥海田村にあり、串山肥後所居とふ、

日裡山（ひるやま）　畑賀村にあり、阿曽沼豊後隆卿一小高里又隆明所築、此據より、二町許を隔て、一巨巖ありて、里人云、隆卿自畫の刀、其中ふ藏めりと、其巖を殿がなだとよび、按ふ陰徳太平記ふ、建武五年、小早川掃部助、民部入道等

亀州（くし）閖田浦、火村山を係（かゝ）るあり、閖田ハ海田をふ

べし、畑賀、海田みな陸遠（ひろく）して、火村（ひむら）、火裏、國音ふ近

しく多くハ當城のことなるべし、さるにても、阿曽沼ハ、そ

の古城を修築て、居守せしやや、

新城　田村にあり、佐伯土佐ふ居、

阿計玖羅（あけくら）城　畑賀府中二村の界ふあり、石津畑

賀ふ居、

檜木（ひのき）城　下瀬野村にあり里阿曽沼近江興卿ふ居、

或ハ、阪山三四郎ともいふ、

丸山　三城　並ニ同村ニあり

伊屋城（二ヲ）　野原山　概木城　並ニ上瀬野村ニ
あり

古墨　同村ニあり、土人隠居山ともいふ、故ともいふ、

嵩山（たかやま）　無野村ニあり、菅田豊治ノ居、山藪ニまぎ
城濠の地あり、出丸ありてもあらんか、里人、堀が塚
ともいふ、

土岐（とき）城　同村ニあり、此城山の藪ニ、別ニ四貫分
ともいふ地あり、土岐の外城なるべし、

掃部山　苗代村ニあり、野間掃部ノ居、

堀城　和庄村ニあり、未永常陸景盛ノ居、

杉迫　同村ニあり、山本甲斐ノ居、

古墨　宮原村ニあり、島未素吾衛ノ居ともいふ、又ハ
宗戸備前ノ居ともいふ、

古墨　庄山田村ニあり、

古墨　二所　押切村ノ内、二畳川ヲ隔テ古對ヒ、守
者ハ知ラズ、或云、一ハ野向氏家人、渡部貞吉ノ
居、一ハ陣城ナルベシ、其別堡ナルヤ、
城平山　境山村ノ内ニアリ、宮原隼人ノ居
堀城　整固屋村ノ内ニアリ、
小濱山　同村ノ内ニアリ
茶臼山　有峰　堀城　並ニ吉浦ノ内ニアリ
天狗城　塔岡　並ニ大屋村ノ内ニアリ

鷹尾山　坂村ノ内ニアリ、
保木城　矢畑村ノ内ニアリ、文安二年、野向掃部重能、
尾張ヨリ来リ、此ノ標ヲ守ル、曽孫隆則ノ時、天文
頃、毛利氏ノ滅ス所トナル、按ズルニ、陰徳太平記ノ、建
武年間、熊谷四郎次郎直貞、矢畑城ヲ守ルト見エ
タレバ、野向氏ハ、其古城ノ標ニヨリテ、武家
名記ノ、畑向左衛門隆貴、矢畑城ヲ守ラントシ、治
太平記ノ、野向常陸介隆実、保木城ノ標ト見
ヘラレ、是皆歴代ノ内ナラヤト思ヘルナド、家譜ノ
モ、此名ヲ、字形、字訓ノ誤ルニテ、隆則ト一人

ることゝ、一説ふ、文明二年、畳阿興務、始て此ふ事ら、
呉ること二代ふて亡ぶとふるハ、誤ることゝ、土官の部
伊里ること。

木船山　船越村ふあり、阿曽沼家人、小田村一ふ小田
陣正所保、或云、陣正、一ふ大之並ともふと、然ルを
下文、飯山城ゟ守者ハ、皆一人ともふ、詳ならず、
飯山　同村ふあり、或云、小田村大之並ふ守、
出張城　陶殿陣阴　府中村ふあり、白井氏数世標守
ゟ、天文年間、大同氏ふ攻られ、城陥るとふ、陶殿
陣ハ、陶が留営の地ゟるとふ、
千代山　同村ふあり、出張城、没落の後、白井備中が
子、万五郎ハ、大内氏ふ降参ゟ、當城を守ら
しめしが、後毛利氏ふ滅さるゝと云、
平家城　別所城　同村ふあり、田所氏云、昔平家敗
走して、田所氏ふ托して、暫此地ふ居ゟるが、後赤
間関ふ遁ゟる、故ふ平家城とふ、里人ハ誤りて、
へつが城と称ゟ別所城ハ詳ならず、

永町山　温品村ニあり、温科左衛門家行一ニ家臣ニ居、
北谷山　屋大山　鶴江山　並ニ因村ニあり、
茶臼山　戸坂村ニあり、戸坂八道道海が居保なり、
武田の塵下なりしが、罠を設て滅さるゝ云、
甲山　牛田村ニあり、
鏡山　田原　並ニ中山村ニあり、
多ゝ萬比城　矢賀村ニあり、
古墨　仁保島ニあり、三浦兵庫ニ居、天文頃首城、其

後毛利家より、香川左衛門光景をして、城番とせしが、一説ニハ、白井越中、ニ此城ニ居るとゝ、三浦氏より前なるや、

警部城　江田島ニあり、警部ハ、城主の氏なりや、

今所傳なし、

外城山　瀬戸島ニあり、小早川家人、並久因幡ニ守る、

復見　上口　先郷　並ニ、同島ニありて、守者詳ならず、或云、先住ハ、重見某が塹なり、

古墨　渡子島ふあり、

古墨　倉橋島ふあり、河野氏麾下、多賀谷右馬頭、與重、地頭とあり、此城ふ居住あり、其子與頼ふあり、弘治元年、毛利氏ふ滅さる、

丸屋城　蒲刈島ふあり、多賀谷式部景義始て城く、其後十二世、久兵衛元重、天正年中まで居住せしとふ、

岡ノ小三郎實廣宅地　和庄村ふあり、應仁問の御士なり、

佐川四郎方利宅地　田村ふあり、天正問の御士なり、

墳墓

大山鍛冶氏墓　上瀬畔村、大山の内にあり、古刀銘盡を掘ふ、建武の頃、安藝ふ名鍛匠あり、未之左安吉と稱す　初安行

守重、則安、光久、應仁の頃まで五世、此ふ在て、刀を造りしとふ、古刀銘盡、一平ふ、光久あり、旦安吉と守、守重、則安、宗重と、次第を、有ふよれば、光久ハ子くして、宗重あり、それ是ならや、

阿曽沼氏墓　中野村、宗源寺の側ふあり、草間ふ

埋まて、極て辨しかたし、或ハ、山畔などに、卵塔を遺
したるもあり、

武田刑部少輔墓　新山村、不動院の後邱にあり、
大なる五輪塔なり、文字いなし、

可児才蔵墓　矢賀村にあり、墓の前面を、土人ハま花
嶺(たけ)とよぶ、碑面ハ、かにさいそう藤原吉長、生國
尾州葉栗郡、樂典卿、干時、慶長十八年十一月廿
四日と刻せり、ま蔵が女(むすめ)、恒子(つねこ)が所書と云、按ずるに

始め、佐々成政ハ屬し、後福島氏ハ仕て、當國ハ
移る、遠言して、此嶺ハ、薬らしむ、其意おもひやらるゝ、
て、梅冠(うめかぶ)を摧(くだ)くて、此嶺、藩府の東、要路ハあれ
る故なり、其實可児某云、この地、ま蔵が持を
ハる山荘の内なり、之称中ハ、可児ま龍軒が建る石
燈籠あり、

三浦兵庫墓　仁保島、觀音寺の内にあり、碣(いしぶみ)、磨滅
して、讀(よむ)ことゝ、

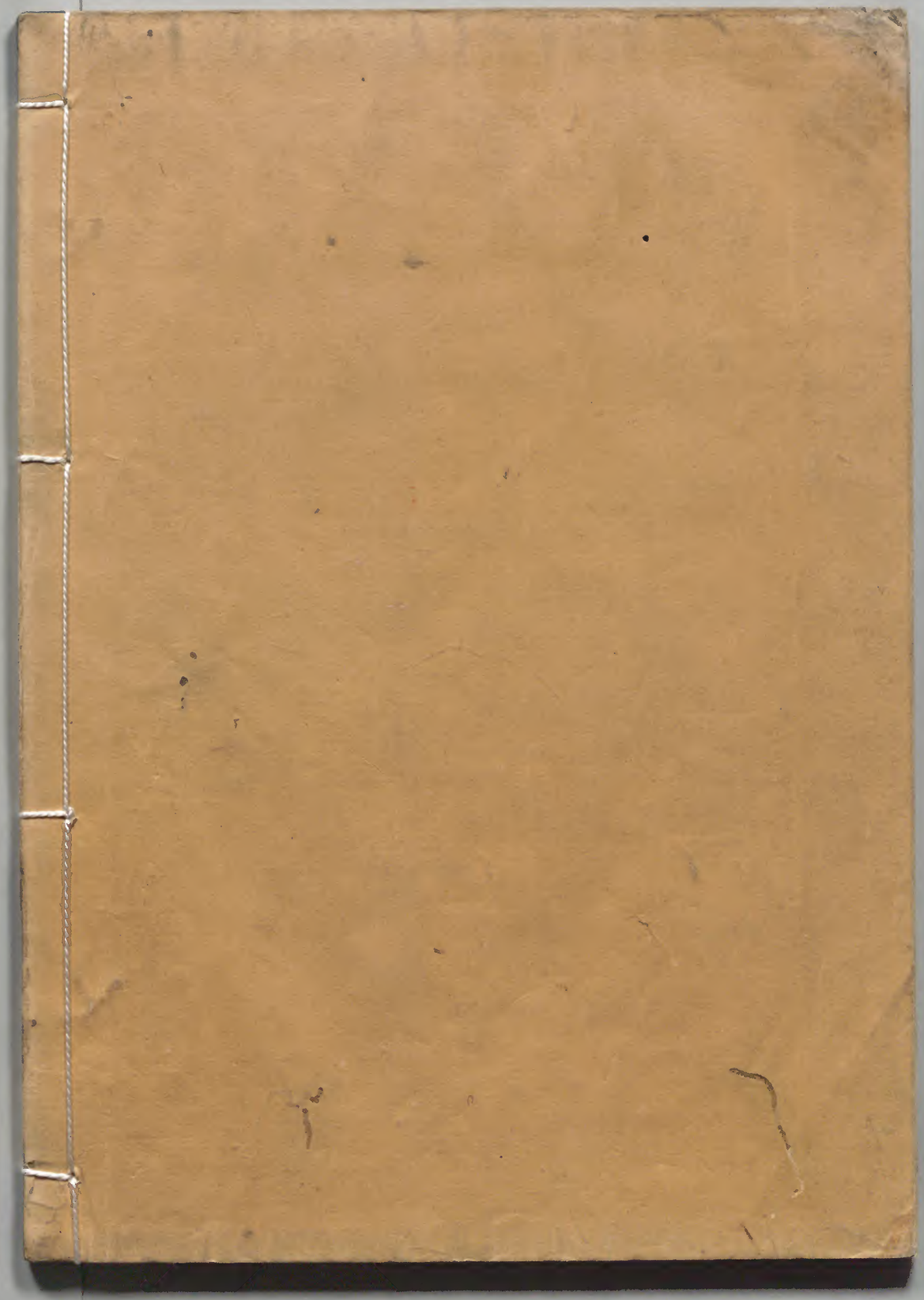
古墓　瀬戸島、西向寺跡あり、五輪石塔あり、正面
須弥、心重見の三字のこりて、餘は磨滅せり、按
ふ、是延文、故城の郭内、光阿の城主、重見氏
の碑なるべし、
多賀谷氏墓　倉橋島、海越浦、西蓮寺の内あり、
海越土佐墓　日島、海越浦、柯木の間あり、小卵
塔なり、又傍に残欠の石塔あり、土佐が一族の
墓なるべし、

図書文庫

多賀谷修理墓　蒲刈島、城北の内にあり、大五
輪塔なり、

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan